慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オズワルド・モーズリーと戦間期イギリスにおける議会主義批判：乖離する二つの民意と「権力融合」
Sub Title	Oswald Mosley and criticisms of parliamentarism in interwar Britain : two divergent popular wills and the fusion of power
Author	山本, みずき(Yamamoto, Mizuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院法学研究科内『法学政治学論究』刊行会
Publication year	2023
Jtitle	法學政治學論究 : 法律・政治・社会 (Hogaku seijigaku ronkyu : Journal of law and political studies). No.137 (2023. 6) ,p.89- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-20230615-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オズワルド・モーズリーと戦間期イギリスにおける議会主義批判

――乖離する二つの民意と「権力融合」――

山本みずき

はじめに
一　モーズリー評価の変容
二　経済危機と統治機構改革
三　「若い国家主義者による新しい政党」の画策
　(一)　ニュー・パーティの設立
　(二)　小選挙区制の障壁
四　イギリス・ファシスト連合の設立と議会主義批判
おわりに

はじめに

本研究は、戦間期にイギリス・ファシズム運動を率いることで第二次世界大戦後には悪名高い人物となったオズワルド・モーズリー（Oswald Mosley）の政治構想を、とりわけ彼の議会主義批判という視座から明らかにするものである。[1] 具体的にはイギリスのエリートのあいだで議会主義への懐疑が広まった戦間期を取り上げ、既存の政治体制に代わる処方箋としてファシズムに目指すべき未来をみたモーズリーの政治構想を明らかにした上で、周囲の政治家や知識人の反応を描き出す。同時代の議論のなかにモーズリーの主張を位置づけることを通じて、戦間期イギリス政治史に新たな光を当て、いかなるコンテクストの中でイギリスのファシズムが盛り上がりを見せたのかを明らかにする。

なぜ今九〇年以上前の時代に遡り、ファシズム運動の後進国であったイギリスの事例を取り上げるのか。一つにはモーズリーと周辺人物の議論を丹念に追うことで、英国においても議会主義に対する諦念から、議会改革の構想やそれに代わる政治体制を模索しようとする動きがエリートの間に広まっていたことが浮かび上がるからである。当時のイギリスの知識人や政治家のあいだで広まっていた議会主義の斜陽という認識はなぜ生じたのか。その要因を、モーズリーを通じて探ることで、議会主義の母国であっても間接民主主義は盤石ではなく、行政府の集権化を希求する運動が体制内部からも起こり得ることを指摘する。

後に詳述するように、戦後のイギリス社会では、モーズリーは世紀史上の極悪人のごとく描かれてきた。だが、同時代の言説の中に彼の統治機構改革の構想を位置づけることでモーズリーの構想それ自体は必ずしも特殊ではなかったことが明らかになろう。それどころか彼の問題意識には、現代にいたるまで高い評価を受けている、よく知られた政治家や知識人たちとの共通認識すら見出すことができる。そして戦後の評価とは裏腹に、戦前においてはモーズ

リーの過激とも捉えられる主張に対して賛辞を送る人々の姿もしばしば見られた。元首相経験者である労働党のラムゼイ・マクドナルド（James Ramsay MacDonald）や、保守党のハロルド・マクミラン（Harold Macmillan）など、党派を超えて多くの者がやがてモーズリーが権力を手にすることを疑わなかった。この点について、同じ時代を生きたチャールズ・ピトリー（Charles Petrie）の言葉は示唆的である。「モーズリーが失敗した理由は、彼の政治的諸手法の故であって、彼の政治的諸目的の故ではなかった。（中略）英国ファシズムは歴史的なある瞬間に於いて、考慮に値する一個の力強い勢力であったという事実に我々は目をつぶってはならないのだ」[2]。今一度戦間期に立ち返り、同時代における彼の評価を描き出すことが第二の目的である。

ブリティッシュ・ファシズムに関する研究は、ドイツやイタリアにおける豊富なナチズムやファシズム研究の影に隠れることが多いが、すでに一定の研究蓄積がある[3]。以下簡単に、先行研究について概観したい。「ブリティッシュ・ファシズム」という用語をめぐっては、果たしてそれを「ファシズム」と位置づけることが可能かどうかという争点を含め、論者の立場や用いる文脈に応じて多様な解釈が存在しており、簡明に定義することは容易ではない[4]。他方でイギリスにおけるファシズムの歴史は、第一次世界大戦前まで遡ることが可能であり、また戦中・戦後を通して民族主義的で人種差別的な団体もいくつか存在していた。しかし、いずれもイギリス社会に影響を与えるには至らず、その点ではモーズリーの政治運動がイギリス史上最も盛り上がりをみせたファシズム運動と論じることが可能であろう[5]。

一九六一年にコリン・クロスが公表した研究[6]は、ブリティッシュ・ファシズムの歴史研究において転機となり、この研究に端を発して一九六〇年代以来ブリティッシュ・ファシズムおよびイギリス・ファシスト連合に関する研究は盛り上がりを見せた。他方で、イギリス・ファシスト連合について、コリン・クロスの研究ではイデオロギー分析という観点が抜け落ちていたことに加えて[7]、イギリス・ファシスト連合のメンバー[8]が投獄されて組織が瓦解する第二次

世界大戦以降の時期は分析というより記述に留まっている。また、一九六〇年代初頭のその当時には公開されている資料に依然として多くの制約があったこともあり、政府文書や個人文書などその後に公開された決定的に重要な資料が利用されていない。その八年後にコリンの研究をより深める形で、ロバート・ベネウィックが *Political Violence & Public Order* を刊行し、イギリス・ファシスト連合における暴力性とそれに対するイギリス政府の反応を明らかにしている。[9] 同書のタイトルからは読み取ることができないが、ベネウィックはそのなかでイギリス・ファシスト連合のイデオロギーについても分析している。しかし当時も同様にアーカイブ史料へのアクセスが制限されていたため、新聞記事などに頼るしかなく、結果的に結論には誤りも含むことになった。

一九七〇年代に入り、ようやくニール・ニュージェントが本格的にイギリス・ファシストのイデオロギー分析を試みており、これは後の研究の基礎ともなる不朽的名作として位置づけられている。[10] ニュージェントはイギリス・ファシスト連合のイデオロギーの中で次の三点の重要性を強調している。一点目はモーズリーたちの資本主義への危機意識である。そもそも「コーポレート・ステート」と「ファシスト的規律」は資本主義に対する危機意識から打ち出された政策であったために、モーズリーたちの資本主義の危機という認識を適切に理解することの重要性を説いた。二点目は反ユダヤ主義、[11] 三点目は保護主義的な対外政策である。ニュージェントの研究に先立ってベネウィックもすでにこれらの特徴を明らかにしてはいたが、ニュージェントが思想の一貫性を唱えたのに対して、ベネウィックはこれら三つの特徴はイギリス・ファシスト連合の発展に伴いそれぞれ異なる局面で浮かび上がったものだと結論づけている。

ニュージェントのイデオロギー研究は、モーズリーおよびイギリス・ファシスト連合のイデオロギーの主要な特徴を浮かび上がらせたとは言え、あくまでも一部を明らかにしたに過ぎず、全体像を捉えているとは言い難い。こうした問題意識を抱いたステファン・キュウレンは、二〇一六年に発表した研究で、ニュージェントが提示した三つの主

要な特徴に、新たに三つの特徴を加えた。[12] 一点目は「超愛国主義（hyper-patriotism）」であり、モーズリーらイギリス・ファシスト連合のメンバーが国王、国家、帝国を惜しみなく称賛していたことに注目している。二点目はメンバーが第一次世界大戦に従軍したことへの情熱であり、これが後に「旧来の議会政治に固執する古い世代」に対抗するために従軍経験者によって組織された「ユース・アライアンス（Youth Alliance）」へ発展する。そして三点目は、その挫折である。次第にイギリスの経済状況が回復するにつれて、自身を経済危機の救済者と位置づけたモーズリーは自ら作り上げた理想像を打ち砕かれたことで、ファシズムが政治に関与する必要性を見失ってしまった。そのため、イギリス・ファシスト連合は、社会状況の影響を受けながら、時期ごとに異なるイデオロギーを形成したという。

他にもモーズリーのリーダーシップや性格など個人的特徴に焦点を当てた評伝的研究も存在し、[13] これらは個別的に異なるモーズリーのファシズム思想の一側面に焦点を当てている。

なお、日本におけるモーズリーおよびイギリス・ファシスト連合に関する研究はこれまで等閑に付されてきた観があるが、一九七五年に戸塚秀夫がモーズリー研究[14]を発表して以来、一九九八年に中村幹雄が「イギリス・ファシスティの登場と挫折――保守主義とファシズムの関係」『奈良法学会雑誌』（一九九八年）を発表するまで、モーズリーとイギリス・ファシスト連合に言及した研究としては他に三本の論文が存在する。戸塚の研究は、同年にイギリスで出版されたスキデルスキーの画期的なモーズリー伝を参照できなかったため、当時の最新の知見を盛り込むことができなかった。また、自己弁護的な記述を差し引いても、モーズリーによる自叙伝もまた重要な史料になることは明らかだが、それも用いられていない短所がある。その点では、見市雅俊「サー・オズワルド・モーズリーとイギリス・ファシズムの生成」『西洋史学』第一一七号（一九八〇年）は同時代の研究と公開されている資料を援用してバランスを取ろうとする試みが見てとれ、なおかつファシストに至るモーズリーの人物像・諸政策を詳細に描いた優れた論考である。

スキデルスキーのモーズリー伝に対しては、モーズリーの失墜した名声の回復を目論んだ伝記だとする批判があることは否めないため、[15]できる限り他の評伝も参照することが求められている。バーミンガム大学資料室に所蔵されているモーズリーとスキデルスキーのあいだで交わされた書簡[16]は二〇四〇年一月一日まで非公開とされているが、一九七五年にモーズリー自身が綴った「ロバート・スキデルスキーの伝記の批評」（日付不明）[17]は公開されており、スキデルスキーのモーズリー伝に対する、モーズリーの評価を知ることができる。モーズリーは批評の中で親戚から寄せられた感想を引用して、「この伝記は決してモーズリーの崇拝者によって書かれたわけではない」ために「モーズリーにとっては我慢ならない描写もある」ことを仄めかしているが、自らの言葉によってスキデルスキーを批判することを慎重に避けており、「私には公平な伝記に思える」[18]と肯定的に締めくくっている。

続いて発表されたのは佐藤恭三「モーズレイと英国ファシスト同盟」『政治経済史学』一八〇号（一九八一年）であり、この研究はモーズリーが指揮をとったイギリス・ファシスト連合の歴史とその前史を概観する試みであった。最後に紹介する桾沢栄一の「イギリスのファシズム運動とその思想――一九三〇年代のモーズリー卿の政治思想を中心に――」『埼玉女子短期大学研究紀要』（一九九七年）は、イギリスにおけるファシズム運動の歴史を踏まえた上で、モーズリーのイギリス・ファシスト連合の政策と思想の中でも、コーポラティズムを中心に明らかにしている。

ファシズムという用語をめぐり、あらゆる諸国の事例を包摂できるような、学術的な定義が共有されているとは言い難い。[19]他方で、ファシズムという性質を理解する上で極めて有用な概念の整理は着実に進められてきた。「第三の道」としてのファシズム、マルクス主義の立場から見たファシズム、政治・経済危機に対する下層中産階級および中産階級の反応として生じたファシズム、全体主義の一例としてのファシズム、近代化理論として説明されるファシズムなど、例を挙げると枚挙にいとまがないが、なかでもエルンスト・ノルテ、スタンリー・ペイン、ロジャー・グリフィンによる定義は大きな注目を集めた。ノルテは「ファシズムの三つの側面」として、「二度の世界大戦に挟まれ

た時代性」、「一九一七年のボルシェビキ革命の影響」、「メタポリティックな政治現象」を提唱し、とくに前者二点に挙げた特殊な時代性がファシズム現象を理解する上で鍵となることを指摘した[20]。そしてファシズムについて、あらゆる既存の政治形態に反する姿勢を見せる「アンチ・ムーヴメント」の側面を強調し、ロジャー・グリフィンは、「ポピュリストに駆られた反復発生型ウルトラ・ナショナリズム」のイデオロギーとしてファシズムを位置づけている[21]。

多くの研究者がファシズムの国家の枠組みを超えた普遍的な共通性の存在を否定してはいないものの[22]、一方でファシズムやナチズムという政治的現象は各国の根深い歴史・文化的背景のもとに生じたものと理解し、それを特化しようと試みる動きもある。歴史家のケヴィン・パスモアも、ファシズムとは地域ごとに独自の意味合いを持つ思想であることを前提として、定義から離れて歴史叙述によってファシズムを論じる研究手法を用いている[23]。

たしかに日本やイギリスのようにヨーロッパ大陸から離れた国にイタリアやドイツを中心とする大陸型の「ファシズム[24]」概念をそのまま適用して論じることには疑問の余地が残る。というのは、モーズリーはイギリスに「ファシズム」を輸入する際に次のように述べているからである。「一八世紀にフランスで始まった自由主義、一九世紀にドイツで始まった社会主義が独自の形で各国に根づいたように、二〇世紀のファシズムもイギリス特有の思想や手法に適合させなければならない[25]」。このようにイギリスに流入した「ファシズム」も他の多くの政治思想と同様に共通基盤を残しながらも独自の形で発展を遂げていくことになる。

また民主主義体制の模範として参照されることの多かった戦間期イギリスにおいても、民主主義への懐疑が高まっていたことを指摘する研究は昨今徐々に増えてきている[26]。本稿では主に対象人物の著作や日記などの個人文書を用いて、反体制派の旗手たるモーズリーの議会主義批判と統治機構改革案、それに対する同時代人の反応を分析することを通じて、議会主義が低迷し、なおかつ批判を集めた戦間期イギリス政治史の一端を明らかにしたい。

一　モーズリー評価の変容

二〇〇五年にＢＢＣがヒストリー・マガジン上で発表したものに「イギリス史上、最悪の一〇人（'Worst' Historical Britons List）[27]」というリストがある。これは時代を一〇〇年単位で区切り、歴史家たちが各時代における悪人を一人ずつ選んだリストで、一八〇〇～一九〇〇年には「切り裂きジャック」との異名を持つ猟奇殺人事件の犯人が選出されている。彼は、鋭利な刃物で被害者の喉を掻き切り、臓器を摘出するなど凶行を繰り返した異常犯罪者である。続いて二度の世界大戦が勃発した一九〇〇～二〇〇〇年、言わば「二〇世紀最悪の人物」に選ばれたのが、オズワルド・モーズリーであった。

日本ではあまり馴染みのない人物だが、彼は一九八〇年に世を去って、今なおイギリスのラジオやテレビで特集を組まれるほどイギリス史に強烈なインパクトを与えた政治家であった。果たしてモーズリーは戦後のイギリス社会のなかでどのように捉えられてきたのだろうか。

「常軌を逸したイギリス人といえば、オズワルド・モーズリーただ一人である」。第二次世界大戦から半世紀を経た一九七九年五月一一日にイギリスの週刊誌『ニュー・ステーツマン（*New Statesman*）』誌はモーズリーを取り上げてこう報じた[28]。一九七五年には、イギリスの著名な歴史家Ａ・Ｊ・Ｐ・テイラーは『オブザーバー（*The Observer*）』紙において、モーズリーについて「才能を無駄にした人物」という評価を下した[29]。一九八〇年には『タイムズ（*The Times*）』紙が「彗星の如く現れ、そして消えていった、論争的な政治家」との見出しでモーズリーを取り上げている[30]。同日『デイリー・テレグラフ（*The Daily Telegraph*）』紙は「権力を夢見たが、凋落を運命づけられた男」として論じている[31]。

戦前のモーズリーは、ウォール街に端を発する経済不況が引き起こした失業者の問題に真正面から向き合い、巧みな弁舌と洗練された立ち居振る舞いによって会う人を次々と魅了してきた政治家であった。労働党時代にモーズリーにランカスター公領相の地位を与えた首相マクドナルドにとって、もし自分が良家に生まれついたなら「そうなってみたい」と思うような人物がモーズリーであったし[32]、元外交官であり文筆家としても著名なハロルド・ニコルソン（Harold Nicolson）もまた、モーズリーの洗練されたマナーに惹きつけられた人物の一人であった[33]。その同一人物が、政界から身を引いてもなおこのような評価を下され、「二〇世紀最悪の人物」と称される所以は一体何であろうか。

それは、モーズリーがイギリスにおける稀有なファシズム運動の指導者として歴史にその名を刻んだことが最も大きな理由であろう。

モーズリーの率いる政治運動は、その黎明期には、ニコルソンなどファシズムに否定的な人物も巻き込んでおり、ジョン・メイナード・ケインズ（John Maynard Keynes）も経済政策に限って賛意を示していた[34]。しかしイギリスを絶体絶命の危機に陥らせたアドルフ・ヒトラー（Adolf Hitler）のナチス・ドイツを彷彿とさせるファシズム思想を蛇蝎のごとく嫌厭する現代のイギリス人にとって、自国のファシズム史を否定的な先入観を持って見るのは当然であろう。それ故に、モーズリーに対しては戦前と戦後で対照的な評価が下された。

モーズリーは、道を踏み外さなければ首相となっていた可能性が高い。第一次世界大戦が終結した一九一八年、当時最年少の二二歳という若さで政界入りを果たしたモーズリーは、その際立った弁舌の才能と行動力から、同時代の知識人や政治家から将来の首相と目された。それもウィンストン・チャーチル（Winston Churchill）が政治家として活躍した激動の時代に大きな期待を集めたのである。

そのチャーチルとは二度目の結婚により縁戚関係を結んでおり、遡って一度目の結婚相手は、外務大臣を務めたイギリス政治の傑物の一人であり保守党の重鎮ジョージ・カーズン（George Nathaniel Curzon）の娘であった。モーズ

リー自身も準男爵家の長男として生まれ、上流階級に出自を持つ人物である。結婚式にはイギリス政界の要人のみならず、ベルギーの国王夫妻など錚々たる顔ぶれが並んだ。目の前で階級社会が倒壊しはじめた二〇世紀初頭であるが、未だ貴族政治の影は残っており、従来政治の舵取りを行ってきた上流階級の社交界で、持ち前の行動力と社交性から豊かな人脈を築きあげた。

だが彼が将来を嘱望されたのは、単にその幅広い人脈に拠るわけではない。同時代の社会問題に対して先駆的な解決策を提示しようと奔走し、その姿勢が多くの同時代人を惹きつけたのである。ある時にはケインズと繰り返し意見を交わし、不況を解消するためにイギリスがとるべき経済政策について二人は部分的に認識を共有する。二〇世紀の偉大な経済学者とも称されるケインズは、他のどの政党の政策よりもモーズリーの政策が優れていることを認め、モーズリーが党首を務める政党に投票することを約束した[35]。またある時には社会主義知識人のグループであり、今なお労働党に対して影響力を持つフェビアン協会の中心人物、すなわち劇作家としても著名な社会主義者バーナード・ショーやＬＳＥの設立に尽力したウェッブ夫妻から、「社会主義の次に信用できるのはモーズリーの思想である」という最大の賛辞を受け取った[36]。

その先駆的な政策と同等に、あるいはそれ以上に同時代人を惹きつけたのは彼の人柄だったと言っても過言ではない。彼の主張に否定的なジョージ・オーウェル（George Orwell）にさえ「モーズリーは相当講演がうまい」と言わしめたほどの弁舌の才に恵まれたモーズリーは、まだテレビやラジオが普及していない時代において次々と聴き手を虜にしていった[37]。『マンチェスター・ガーディアン』紙はモーズリーの選挙演説を臨場感溢れる筆致で次のように描写している。「オズワルド・モーズリー氏がマンチェスターの自由貿易会館で演説を終え、着席すると、聴衆は稀にみる熱狂ぶりを示し、立ち上がって嵐のような拍手を演台に送った。これまでイギリスの宗教、政治、ビジネス界は時に応じ完全無比の英雄を輩出してきたが、ここにいるのもまさしくその英雄のひとりだと、誰も疑うものはなかっ

た」[38]。首相として戦後のイギリス政治を率いた保守党の政治家ハロルド・マクミラン（Harold Macmillan）は、モーズリーについて次のように評した。「彼は、卓越した才能と強烈な個性を無駄にしてしまった。もし適切なタイミングを待つことができれば、おそらく権力を手にしたであろう」[39]。モーズリーに可能性を見出したのは保守党の政治家だけではない。労働党党首であり二度にわたって首相を務めたマクドナルドは、モーズリーを自身の首相後継者として考え、政治家としてはまだ若輩とも言える三三歳のモーズリーに閣僚ポストを与えた。本来政治信条が異なるはずの保守党と労働党のいずれの側からも未来を託された彼はまさに次世代のホープであった。

その同一人物はヨーロッパ大陸に渡るとイタリアやドイツで次々と「ファシスト」[40]との人脈を築いていく。二人目の妻との結婚式はヒトラー列席の下、ヨーゼフ・ゲッベルス（Joseph Goebbels）の邸宅で執り行われた。ホブズボームが言うところの「イデオロギーの時代」に、保守派から左派、学者から政治家、イギリスの指導層からヨーロッパ大陸の独裁者に至るまで、多種多様なイデオロギーと階層をある一人の人物が越境し、戦間期の国際政治を動かした傑士たちと緊密な関係を築いていった。やがて彼は英国史上最大規模を誇るファシズム運動を主導する。その人物こそが後世の歴史家から「二十世紀最悪の人物」[41]と称される本稿の主要人物オズワルド・モーズリーである。

しかしモーズリーは、戦後に受けた酷評とは裏腹に、政治家として初期の頃は議会人や知識人から傾聴される人物としてみなされていた。保守党や労働党の若き政治家たちが党派を超えてモーズリーのもとに集い、共に新たな政治運動を画策した時期もあったのである。痛烈な議会主義批判を繰り広げ、ついにはファシズムを奉じたモーズリーの政治運動をイギリス政治史から捨象するのではなく、モーズリーと周囲の人物に共通する政治的諸目的を明らかにすることで、戦間期イギリスにおける議会主義の問題点が浮かび上がるのではないか。以下ではまず、モーズリーのファシスト期に至るまでの政治運動の歩みと主張を概観する。

二　経済危機と統治機構改革

イギリスで一八九〇年代に生まれた人々は、「失われた世代」と呼ばれる。彼らは二〇代前後の青春時代に第一次世界大戦を経験し、若くして前線の塹壕や空中戦で死と隣り合わせの経験を余儀なくされた。第一次世界大戦勃発から二年後の一九一六年に徴兵法により一八～四〇歳までの独身男性が徴兵されたのである。戦死者のほとんどは若い男性であり、パブリック・スクールやオックス・ブリッジで学び、これから戦争で疲弊したイギリス社会を立て直すために必要とされたはずの若きエリート層が、戦争によって失われてしまった。

一八九六年生まれのモーズリーも「失われた世代」に属する人物である。彼は空軍で訓練を受け「ロイヤル・フライング・コース」の一員としてフランスへと渡ったが、不運にも操縦していた戦闘機の着陸事故に遭い、片足に軽度の不具を負った。一八歳の青年は送還され、一九一八年の終戦をロンドンの地で迎えることになる。

青春真っ盛りの時期に戦争を経験した若者たちは、生き残った者として、同年代の戦死者たちに対して終生変わらない感情を抱き続ける。次の一文は終戦直後にモーズリーが語ったものである。「二度と戦争をしてはならない。生き残った人々のためにより良い社会を作らなければならない。同胞の死という記憶によって、我々はより崇高な世界をつくらなければならない」[42]。彼はすぐさま政治の世界を目指すことを決意した。「英雄たちにふさわしい祖国（a land fit for heroes）の再建」と「社会主義的帝国主義の実現」をスローガンに掲げて[43]、一九一八年にモーズリーは保守党の公認候補としてハローから出馬し勝利をおさめる。ここに二二歳の最年少議員が誕生した。

モーズリーは議会人として政治キャリアを歩み始めた、いわば議会主義のシステムの中に組み込まれた人物であった。その内部にいたモーズリーが、なぜ後に議会主義を批判するに至ったのか。それを理解するために、まずはラン

カスター公領大臣時代の彼の政策と政治的歩みを振り返らねばならない。彼はこの頃から強力な統治機構の改革を訴えていたのだが、後に展開するような議会主義批判には至っていなかった。しかし、長きにわたる彼の議員経験が後の議会主義批判を生みだすことになる。

モーズリーがランカスター公領大臣に任命されたのは、一九二九年の第二次労働党政権の組閣に伴うものであった。同年のイギリスは先例にないほどの経済危機に直面しており、組閣された労働党政府の主要課題は高失業率に対処することであった。失業問題に取り組むための内閣委員会が新たに設立され、その取りまとめを任されたのは国璽尚書であるJ・H・トマス（James Henry Thomas）であったが、彼は増大する失業者数を前にパニックに陥り休職を余儀なくされた。そこでモーズリーは、ランカスター公領大臣と兼任して、失業問題に責任を持つトマスの補佐役にも任命された。主にはトマスの代役として、地方の様々な労働計画に関する特別権限を有することになったのである。ランカスター公領大臣は閑職であるが、失業問題はこの時代の最大の争点であり、若干三三歳のモーズリーにとってこの特別任務には職位以上の責任が伴うものであった。

モーズリーは、経済学者ケインズの助言を基に自ら筆をとり、後に『モーズリー・メモランダム』として知られることになる一連の包括的な提議書を作成した。首相マクドナルドに宛てて、トマス主導の対策を継続することは避けるべきであること、自らの提案よりも優れた代替案があれば受け入れるつもりであることを添えて、提議書『モーズリー・メモランダム』を内閣に提出した[44]。ここには短期間で実行可能な対策と、長期的視点に立った改革が併せて示された。

短期的政策として、まず失業率が急激に上昇したのは、外国経済の崩壊とその外国経済への輸出にイギリスが依存していたためであるとし、海外市場の崩壊とそれに伴うイギリスの輸出の不振はイギリスの産業を事実上崩壊させたと論じられている。当時は、世界の輸出貿易におけるイギリスの以前のシェアを取り戻すことに焦点を当てた経済政

策が正統派と見做され政府内での影響力を有していたが、モーズリーはこれを時代錯誤であると批判した。外国関税もしくは直接的な統制によって外国製品は締め出されるべきであり、かかる条件の下でのみ、イギリス本国の諸産業は効率的に機能し、公正な賃金が支払われるであろうという、いわば保護貿易論者の主張を基にした見解を示したほか、失業者の数字を減らすために、学校卒業年齢を一四歳から一五歳に延長し、被保険者への年金給付を現行の五五歳から六〇歳へ引き上げること等を提唱した。後のファシスト期のモーズリーにまで引き継がれるのは保護貿易の面であり、モーズリーは一貫して、イギリス経済を活性化させ、完全雇用を可能にするためには世界規模の自由貿易市場からイギリスを「隔離すること」が重要であると考えていた。

また以上の一時的な対策とは別に、長期的視点にたった抜本的な機構の改革も提唱した。「当面の失業対策と長期の経済再建の両方の目的のためには、これまで採用されてきた、あるいは現在考えられているよりも、はるかに大規模で包括的な組織が必要である」として政府内に新たな部局を創設することを提唱した。具体的には、一二人の有給かつ常勤の経済学者からなる委員会が、首相直属の組織として、議会を通さずに政府の経済政策全体を決定する権限を有することが提示されたのである。この経済学者からなる委員会の決定した政策を執行する権限は首相にあてられたが、あくまでも閣僚委員会の助言を受けて実行するものとされた。いわば「経済参謀本部」の創設である。

異例の経済危機に対処するために、議会を通さずに首相権限により経済政策を遂行するシステムが必要であるとモーズリーは考えたのである。このような行政府の権限を肥大化させる措置は、ロイド＝ジョージ（David Lloyd George）によって一九一六年に創られた最高戦争評議会に先例がある。これは戦時中の意志決定を迅速化させるための組織であるが、モーズリーにとって目前の経済危機は第一次世界大戦と重なるほどに深刻な事態だったのであろう。

この『モーズリー・メモランダム』は首相マクドナルドの命により、大蔵省および失業対策のための内閣委員会内で慎重に検討されたが、いずれの側からも拒否される結果となった。その最大の要因は、改革案が新部局の創設を伴

う大規模なものであることに加え、自由貿易に対する執着を断固として示した大蔵大臣スノーデン（Philip Snowden）にあったと言われる。スノーデンを中心として政府内には自由貿易主義に対する原理主義的とも言える執着がみられた[45]。「自国民の購買力を基盤とした自国市場を発展させたい[46]」と考えるモーズリーの主張に対する代表的な批判は、アメリカと比べて国土と天然資源の不足は著しく、イギリスが自国の市場に基づいて経済発展を進めることは実現不可能であるとの指摘であったが、これに対しては、大英帝国が充分な資源と貿易の機会を提供できると反論している[47]。

また政府内の失業対策委員会以外に、大蔵省もモーズリーの経済政策を内部で検討しており、外部識者であるリース＝ロスの力を借りて『モーズリー・メモランダム』および五年前に書かれた『理性による革命』（一九二五年）の内容を分析し、次のような回答を残している。

（モーズリーの提唱する）産業の合理化は、政府によってではなく、民間の活動によって行われるべきです。しかし、この問題は、国家の必要性として、また国家的基盤に基づいて、組織化され、推進されるべきではないかと、確実に検討されるべきです。（中略）私は、必要な規模の産業の再編成は、現在完全に取り残されている株式会社銀行の積極的な支援なしには遂行できないと確信しています。合理化を妥当な期間内に遂行するためには、誰かがこの問題を取り上げ、銀行を活気づけることが必要であると信じています。一方、合理化をもっと早く進めなければ、政府がそれを組織すべきだという抗し難い要求が出てくると思います。そうなれば、産業界にとっても、銀行にとっても、とりわけ国家財政にとっても、最悪の結果を招くことになるでしょう[48]。

リース＝ロスは、国家財政上の危惧から民間主導の改革を優先させる必要性を説いているが、社会問題を解決する上で政府ではなく民間が活動すべき説得的な理由は述べられていない。ただ政府が矢面に立たされる前に問題を処理しなければ財政上の支障をきたしかねないことを警告している。

こうして俎上には上がった『モーズリー・メモランダム』はついに陽の目を見ることはなかった。しかしながら同時代の知識人や後世の歴史家からは好意的な評価も受けている。例えばG・D・H・コールは『労働党の歴史』（一九四八年）において『モーズリー・メモランダム』について「私は彼の主張を大筋において正当だと確信している」と述べている。また歴史家コリン・クロスは『モーズリー・メモランダム』は、第二次世界大戦中のチャーチル連立内閣と一九四五年の労働党政府によって用いられた経済政策と似ていなくもない」「これらの改革案のいくつかは、一年前にベヴィンによって既に提示されていた計画案に似ていなくもない代物」と論じている。[49] またA・J・P・テイラーは次のように評した。

> オズワルド・モズリーだけが、挑戦の大きさにふさわしい立ち上りを見せた。彼の提案は、ロイド・ジョージのものより創造的であり、今日にいたるまで経済政策の建設的前進について、多くの場合、その青写真を提供している。モズリーがどこでこうした構想を得たかは不明である。おそらく彼は、自分でそれを考え出したのであろう。もしそうだとすれば、驚くべき業績であり、思弁的な才能を示す。（中略）こうした構想は、J・H・トマスの理解をこえたものであった。それは、スノードンや、労働運動内になお低迷していた自由貿易感情にとって言語道断なものであり、そして正統派社会主義にとってもほとんど同じ程度に、許されざるものであった。[50]

「経済参謀本部」の創設や国家統制下での遅れた産業部門の合理化、帝国内自由貿易といった諸提案があっけなく拒絶されると、モーズリーは自ら大臣の地位を手放し、やがて労働党からも離党することになる。この蹉跌が、モーズリーにより強力な行政府確立の必要性を痛感させたことは想像に難くないであろう。間もなくして発表された『モーズリー声明』では、政府の機構に関して、細部にまで踏み込んだ改革案を提示した。そこでは下院の拒否権に

従属する従来の法律制定権の代わりに、命令に基づく新しい法律制定権限を有する五人の無任所大臣から構成される内閣を要求していた。さらに後には、ムッソリーニのファシズムに代表されるコーポラティズムの思想がここに合流することになる。

同年五月の議会では「経済危機に対処するためには、政府の機構に革命を起こすことが必要である」との演説を行った。いかなる革命が必要なのか。すなわちそれは、「首相と大臣の直接指揮のもとに運営される、適切な調査部門と経済諮問部門を備えた中央組織」を創設することで、官庁ではなく政府が政府の主導権を握るべきだとする『モーズリー・メモランダム』以来の構想であった[51]。この演説は数々のメディアで取り上げられ、『イブニングスタンダード』紙は「最も優れた演説の一つ」という最大の賛辞を送り[52]、スペクテイターはモーズリーの「明晰さとセンス」を絶賛した[53]。

三　「若い国家主義者による新しい政党」の画策

(一)　ニュー・パーティの設立

労働党を離れたモーズリーが次に着手したのは、新しい政党の設立である。古い考えに固執して抜本的な改革に着手しようとしない年配の政治家と渡り合ってきたモーズリーは、活力に満ちた若者による政党を立ち上げることを決意した。二大政党という既存の垣根を越えて、問題意識を共有する若手政治家や知識人に次々と接触を試みていく。その一人がハロルド・ニコルソンであった。「民主主義は死んだ」、そう呼びかけるモーズリーにニコルソンは共感していたという[54]。

当時のニコルソンの日記には次のように記されている。

トム（モーズリーの愛称）はどうやら若い国家主義者による新しい政党を立ち上げることを考えているらしい。彼はまだ何をすべきか、いつすべきかなど明確な構想を持っているわけではなかった。いま動けば時期尚早だし、遅くなればタイミングを失うことになる[55]

この頃、ニコルソンはモーズリーの妻シンシアが所有するカントリー・ハウスに滞在し、モーズリーが訴える経済政策に耳を傾け、イギリス経済をあるべき姿に立て直すべく構想された統治機構改革案に期待を膨らませつつあった[56]。そしてモーズリーから正式に政党を立ち上げる計画を聞いたとき、ニコルソンは日記の中で次のように書き残している。「モーズリーの巧みな会話はテューダー・ウォルターズ（Tudor Walters）からの出馬の誘いを断るのに充分な説得力がある[57]」。ウォルターズは自由党所属の政治家でニコルソンに出馬を勧めていた人物である。ニコルソンは、モーズリーが首相になることを信じて疑わず、自由党からの出馬を取りやめてモーズリーに近づいていった[58]。一一月三〇日の日記には次のように書いている。

トムから、間もなくマニフェストに着手すると伝えられた。実質的にはナショナル・パーティ（National Party）を立ち上げるとのこと。彼はモリスからの資金援助を望んでいる。それから、ケインズやその他の専門家から、彼のマニフェストにサインしてもらうことも望んでいる。オリバー・スタンレーやハロルド・マクミランに加わってもらうことも望んでいる。ビーバーブルックからの支援も望んでいる[59]。

ここで「ナショナル・パーティ」という用語が用いられているのは重要である。一般に国家主義や国民主義に基づき党派を超えて結束する政党として理解される名称であるが、同時代のイギリスにおいて「ナショナル・パーティ」という名称を用いることに対する偏見が、後にファシズムを拒絶する人々の間であっても薄かったことがうかがえる。後述するように、ニコルソンやクレメント・アトリー（Clement Attlee）をはじめファシズムを拒絶した人々は、その暴力性を強調して批判していた。この時点ではナショナリズムそれ自体は批判の対象とはなっていないどころか、「ナショナル・パーティ」に賛意を示す若きエリート達の姿は保守党にも労働党にもみられた。

失業者を減らすという選挙公約を果たすために、閣僚の地位を自ら手放し、既存のシステムを変革しようとするモーズリーの姿に賛同する知識人や政治家は少なくなかった。その中には戦後に首相となる保守党議員のハロルド・マクミランの姿もあった。モーズリーより二歳年上のマクミランも「失われた世代」と呼ばれる一九八〇年代に生まれた人物であり、「戦争世代」としての自覚を政治活動の柱としていたモーズリーと次第に親しくなった。モーズリーが労働党を離れたとき、マクミランは異なる政党に所属していながらもタイムズ紙に長文の記事を寄せ、モーズリーの信念の強さを称えた。[60]

保守党議員として著名な存在であったオリバー・スタンレー（Oliver Frederick George Stanley）やロバート・ブースビー（Robert John Graham Boothby）、ウォルター・エリオット（Walter Elliot）も既存の政党に対してモーズリーと同様に危機感を募らせていた。[61] 彼らもモーズリーと共に目前の社会状況について語り合い、そこでは「ファシストの政変によって状況は改善されるか」[62]という議論にも及んでいた。ニコルソンの日記を読む限り、モーズリーは保守党から復帰を打診されていたが、抜本的な改革を打ち出そうとしない政党に所属する意志は毛頭なかったようである。

いよいよ新党結成に向けて動き出し、約一カ月後には政策の構想も完成間近となった。一二月に入り、モーズリーは『モーズリー声明』を発表し、A・J・クック（Arthur James Cook）ほか一七名の労働党員の支持を得た。[63] 新たな

政治運動を始動するにあたって、さらなる計画を練るため、モーズリーのカントリー・ハウスには有力な若手政治家が集められた。「モーズリーの邸宅に、オリバー・スタンレー、ハロルド・マクミラン、その他の議会議員とともに集まる」とニコルソンは記録を残している。[64] その後バーナード・ショーに促されて、一九三一年一月、ウィリアム・モリス（William Richard Morris）から五万ポンドの資金援助を得て、[65] ついに三月にニュー・パーティを結成した。この党こそがイギリスにファシズムの風を巻き起こす「イギリス・ファシスト連合」の前身組織である。

当時はモーズリーの経済復興政策に共鳴し新党結成に賛同する知的水準の高い若者が一定数いた。参加した国会議員は保守党からはW・E・D・アレン、労働党からはモーズリーの妻のシンシア・モーズリー、ジョン・ストレイチー（John Strachey）、ロバート・ホーガン（Robert Forgan）、W・J・ブラウン（William John Brown）それに保守党党首の子息であるオリバー・ボールドウィン（Oliver Ridsdale Baldwin）がいた。[66] 知識人層では作家のオスバー・シトウェル（Francis Osbert Sacheverell Sitwell）も当初はニュー・パーティの一員であったし、哲学者のシリル・ジョード（Cyril Edwin Mitchinson Joad）はニュー・パーティで宣伝局長を任されていた。メンバーとしては活動しなかったが、ケインズもモーズリーの提唱した経済政策を評価していた。ニコルソンの日記によれば、ケインズはニコルソンに対して、ニュー・パーティへの投票を約束している。

> 一九三一年四月二九日。私はクライヴ・ベル（Arthur Clive Heward Bell）とケインズと夕食を共にした。ケインズはニュー・パーティの経済政策についてとても有益な助言をくれた。しかも彼は、ニュー・パーティに投票すると言っていた。労働党の自由貿易に対する態度に、ケインズはうんざりさせられたらしい。その一方でニュー・パーティの経済政策が他の党が提出しうるどの政策よりも理にかなっていて魅力的だと言ってくれた。[67]

失業率が二三・一％という絶望的な状況にあって、当時のイギリスの聡明な若者たちは新党結成に向けて奔走するモーズリーの背に未来を見たのである。この当時のイギリス政界においては、モーズリーはまだ有能な人物として評価を得ていたことの証左であろう。[68]

その具体的な政策と思想については、ニュー・パーティの会報誌「ニュー・パーティ・ブロードキャスト」のなかで明快に論じられている。第一巻は哲学者のシリル・ジョードによって監修され、ニュー・パーティが設立された目的に関する記述から始まる。[69] 冒頭には「英雄たちにふさわしい祖国」という、一〇年以上前に、モーズリーが初めて選挙に臨んだ際に公約に掲げたフレーズをここでも用い、とりわけ戦争世代に訴えかける内容となっている。他にもニコルソンが編集長を任された機関紙『アクション（*Action*）』にも政策が記されている。それによれば、（1）議会の改革、（2）経済政策の厳正な保護貿易の必要性、（3）帝国内での協力、（4）政府に対する全権法案を公約に掲げていた。[70]

㈡　小選挙区制の障壁

結論を先取りすると、ニュー・パーティは失敗に終わった。その最大の要因は小選挙区制にある。ニュー・パーティ設立から間もなくしてイギリスでは総選挙が実施されることになったが、保守党や労働党から移籍してモーズリーの元に集まったはずの仲間たちは、選挙で議席を失うことを恐れてニュー・パーティから離れて古巣の政党に戻っていった。ニュー・パーティから出馬して総選挙を戦ったモーズリーも議席を失う結果となる。小選挙区制を導入するイギリスでは、二大政党以外の小規模政党には構造的に票が流れにくい仕組みが確立しているために、新たな政党が総選挙で議席をとるのは容易ではない。

さらに、モーズリーのマニフェストに賛同した政治家の中には、いざニュー・パーティが設立されると、移籍する

姿勢を見せずに既存の政党に残る者もいた。その一人が、当初はモーズリーを高く評価していたマクミランである。ニコルソンはある日オックスフォードに向かう列車のなかでマクミランに遭遇し、そのときのことを日記に綴っている。

> オックスフォードに向かう列車のなかでハロルド・マクミランに会った。彼は若い保守党議員たちの見解と同様に、「自分の心はニュー・パーティにあるが、自分が保守党に残ることでこそ手助けできると思う」と言う。マクミランは、ニュー・パーティが議席を取ることに対しては否定的ではない。「保守党、自由党、労働党に属する多くの若者たちの票はニュー・パーティに流れるだろう」と言っていた。マクミランの予測によれば現政権はあと二年ほど存続するらしい。だが五年のうちに、ニュー・パーティには大きなチャンスが到来するだろうと言う。[71]

マクミランは、権謀術数に長けた老獪な政治家であったとの評価を持つ人物である。[72] それは、彼が一九五七年から六三年にいたるまでの長きにわたって首相の地位を維持していたことにも示されている。

もともと彼は「古い政党組織は摩耗しており、今の有権者は（中略）人間や政策をみていると思う」[73]という問題意識を共有して、モーズリーの邸宅にも頻繁に出入りしていた。だが、彼は総選挙を前に一度立ち止まり、「保守党に残るべきか、関係を断つべきか」[74]自問自答した。その答えは、「保守党は巨大な力を持つ道具なのだ」と残留を決めた。[75] 心情的にはモーズリーの政策や政治運動に共感を寄せていても、小選挙区制をとるイギリスにおいて権力を志向するためには、むしろ従来の政党政治の枠内にいたほうが有利に映った。モーズリーの運動によって既存の政治体制が変化するのかまだ明らかではなかった時期に、マクミランは慎重に動いた。

その後、挙国一致内閣の信を国民に問うべく、総選挙は一九三一年一〇月二七日に行われることが決まった。政界

に若者世代の新しい風を吹かせようと待ち構えていたモーズリーはついに自ら立ち上げた政党によって選挙に臨む機会を手にする。だがヤング、ストレイチー、ボールドウィン、ブラウンはこの時ニュー・パーティを去った。総選挙で議席を得るためにニュー・パーティを捨て以前の所属政党に戻っていったのである。

モーズリーは弁が立つことで有名だった。テレビがない時代、政治集会には今の政治家には望むべくもない数の聴衆が集まったが、数万という群衆を前に演説することは、モーズリーにとって造作もないことだった。[76] だが、モーズリーの巧みな話術をもってしても、総選挙でニュー・パーティが成果を残すことは難しかった。結果、挙国一致政権側が全六一五議席のうち五五四議席を獲得して圧勝し、ニュー・パーティの候補者二四人全員が落選してしまった。モーズリーも議席を失い、しかも得票率は最下位であった。[77]

小選挙区制を採用しているイギリスにおいては、政界に新規参入しようとする政党の候補者が当選する可能性は歴史的に低い。[78] 加えて、モーズリーと同時代を生きたオーウェルによれば「事態を左右するのは議会であって、新しい内閣が出現すればめざましい変化が期待される、というような気持ちは、一九二三年（正しくは一九二四年一月）の第一回労働党政府以来次第に薄れてきている」のであった。[79]

結局、国王ジョージ五世からの大命で引き続きマクドナルドが挙国一致内閣の首相を務めることになり、モーズリーのニュー・パーティは実を結ぶことなく、静かに終わりを告げた。留意すべきは、モーズリーは必ずしも政治諸目的の食い違いによりメンバーを失ったわけではないという点である。その多くは、モーズリーの政治運動に賛意を示しながら、当選することを優先して自ら批判したかつての所属政党に戻る道を選択したのであった。

四　イギリス・ファシスト連合の設立と議会主義批判

モーズリーはここから本格的にファシズムへと向かっていく。ムッソリーニの助言を得て一九三二年一〇月にイギリス・ファシスト連合（the British Union of Fascists）を立ち上げた彼は、同時にイギリスにおけるファシズムの教義と政策を説明した『グレーター・ブリテン』（一九三二年）を刊行し、既存の政治体制を批判して改革を訴えた。議会主義に対する批判が著作に記されるのもこの頃である。まずは現行の政治制度を改革する必要性について次のように論じている。

> 英国は戦争時代から立ち直ることができなかった。この結果は、特殊な原因によって複雑になったとはいえ、一九世紀によって、また一九世紀のために設計された政府の制度に大きく起因するものである。個々の政府の行動や能力に対する不満はさておき、私は、現行の制度のもとでは、政府は効率的に運営することはできないと考えている。本書の目的は、現状の分析と建設的な政策によって、根本的な変革の必要であることを証明することにある。我が国の政治制度は、実質的には一八三二年に始まったものである。(80)

一八三二年とは第一次選挙法改正が行われた年である。腐敗選挙区を廃止し、また選挙権の拡大を図ったものであった。それから一九二九年に至るまで五回にわたる選挙法改正を経て、イギリスは男女普通選挙権を確立し、現在に至るまで議会主義を基調とする政治体制を持続してきた。なにゆえモーズリーはこの一八三二年以来の議会主義的政治制度を批判したのであろうか。

第一に、目前に深刻な経済不況が広がっているにもかかわらず、議会が無益な議論を繰り広げ、政府の足枷となっていることを批判した。閣僚や首相経験者の中には、自ら望む政策を実施する上で議会を障壁として認識する者が一定数いた。例えば保守党の党首を務めたスタンリー・ボールドウィン（Stanley Baldwin）は一九三六年に議場で熱弁を振るい、「民主主義は全体主義体制の「効率性」に対抗できない」「民主主義は常に独裁者に二年遅れている」と訴えた[81]。またモーズリーも次のように述べている。「政府のあらゆる行為が、行政問題についての経験も知識もほとんどない議会で、詳細かつ妨害的な議論に付されなければならないとは、到底言えないのである。自由の起源として善意で始まったこの幻想的な制度は、多くの些細な制限で市民を縛り、歴代の政府の手を縛ることで終焉を迎えた[82]」。

アメリカの政治体制が行政権と立法権が独立して相互に抑制・均衡をはかっているのに対して、イギリスの議院内閣制は、議会の信任に依存する形で内閣が組織されている。議会と首相はそれぞれ不信任案提出権と解散権を有することから、イギリスの議院内閣制を権力分立制の一形態として位置づける議論もある一方で、例えばウォルター・バジョット（Walter Bagehot）は『イギリス憲政論』の中で、イギリスの政体に関する三権分立による抑制・均衡という定説を形式的な権力配置論に過ぎないとして斥け、議員内閣制の本質を「権力融合」として捉える[83]。バジョットの理解によれば、国王の行政権への介入に抵抗する上で、議会に信任された、首相の強力なリーダーリップで安定的・効果的な政策の実施を可能ならしめる政治体制こそがイギリスの議員内閣制である。行政・立法・司法が相互に抑制し合うのではなく、国王・貴族院・庶民院が相互に抑制と均衡をはかっている点にイギリスの三権分立の特徴があろう。議会は必ずしも行政府の権力の氾濫を抑え込む装置としてのみ期待されているわけではなく、内閣が効果的に政策を実施するための補助的役割を担っているという、相反する二つの解釈が成り立ちうる。モーズリーは、目前の議会に対して、内閣の補助的役割として機能していないことを批判した。

一九二四年の第一次労働党政権およびモーズリーが大臣を務めた一九二九年以降の第二次労働党政権は少数与党で

あり、議会での多数派を形成できていなかった。それに加えて労働党は内部での分裂を抱え、また労働党組合との対立もあったために、行政府としての内閣の意向がしばしば議会との関係で対立することもみられた。議会の中での多数派工作をめぐる駆け引きが独り歩きしたことによって、本来の民意とは大きくかけ離れ、そのことがモーズリーをはじめとする一部の若手の政治家や知識人に議会主義への不信をもたらす要因となっていたことが指摘できよう。

戦間期のイギリスでは、それまで二大政党の一翼を担っていた自由党が衰退し、労働党が台頭する過渡期にあったために、単独で過半数を獲得できる政党がなくなり、その結果として政党間の立場の調整に時間を要する事態が生じていた。一九三一年の総選挙で連立政権が組まれることになるが、首相マクドナルドは党内造反により労働党党首から解任されており、政権は不安定であることに変わりはなかった。戦間期イギリスでは保守党、労働党、自由党が鼎立することによって、いかなる政党も議会での過半数が得られずに、民意とはかけ離れた政局の動きによって内閣が成立していた。それは、立法府の意向と行政府の意向が一致するように制度設計された議員内閣制とはかけ離れた現実であった。

しかしたとえ議会が内閣から提出される法案を否決したとしても、それが社会にとって有益な機能を果たしているならばモーズリーは議会主義批判には至らなかったかもしれない。モーズリーの目には、議会で繰り広げられる討論が目前の社会の要請に応えていないように映った。「議会は、民意の代弁者であり、またそうでなければならない。しかし、現状では、その時間は主に、国民が知りもしないこと、気にかけもしないことに費やしている。主要な問題を排除して、各省庁や地方の利害関係者が議会に持ち込む多数の小さな対策を延々と議論することで、誰かが良くなると考えるのはばかげている。公共の利益が小さいこのような問題に、国会の時間が奪われ過ぎている。その議論もたいていは無益なものである」[84]。

なおこのような議会討論の形骸化についてはハロルド・ラスキも指摘しているが、戦間期において議会の地位が低

下した理由について、モーズリーとは幾分違った見方を提示している。「国会議員は、衆議院最前列の議席に座る両党の指導的議員でさえ、ほとんど例外なしに、国民の関心を捉えることが戦前の時期に比べてはるかに少なくなった」[85]ことについてはモーズリーと同じ認識であるが、ラスキに言わせれば、だからといって討論自体の意義または重要性が否定されるものではない。彼の分析によれば、一昔前のアイルランド自治問題や選挙法の改正、国民教育の原則などは、あらゆる責任ある市民によって理解され得たし、ウィリアム・グラッドストン（William Gladstone）やベンジャミン・ディズレーリ（Benjamin Disraeli）のような人によってドラマチックに持ち込まれたので、庶民院での討論がただちに国民関心の的になっていた。ところが一九三〇年代には、関税表の細目、レート引下げ計画の方針、農業および海運への補助金の条件など、専門的な知識を有する者の力を借りなければ取り扱うことが難しい議題が多く討論の場に持ち込まれ、新聞各紙も討論内容の報道のウェイトを徐々に下げていったという。

つまりモーズリーには無益に映る議会討論は、ラスキには単に一般大衆の耳目を引く内容でないだけであり、討論自体の意義は認めていた点に相違がある。他方、「どのような制度といえども、制度のもとでみずからの責めによらず貧困に陥り、生産物のあふれる真っただ中で分け前にあずかることなく喘ぎ苦しむ大衆に対して何も成し得ないとすれば、そのような制度は長く存続することはできない」と警告を促している点は、モーズリーとラスキが共有する問題意識であろう。[86]

そのような前提の上でラスキは議会討論の存続を認めたのに対して、モーズリーは議会討論の廃止を訴えた。「現在の議会制度は国民の意志の表現ではなく、否定である」[87]と断じ、立法に際して「多数派」（すなわち内閣）の意志の遂行を議会が妨害していると見做し、批判を繰り広げる。議院内閣制においては、立法府を構成する庶民院も、行政府を構成する内閣も、いずれも間接民主主義により組織されるために、二つの民意を体現する組織が国家権力構造の中に存在することになる。そしてモーズリーは、内閣を「多数派」と見做し、国民の意志を実現するためには、政府

の命令によって立法する権力を確立しなければならないと考えた。だが議会そのものを廃止するのではなく、議会が罷免権を保持したまま討論のみを排するべきであると論じた。

> 我々は国民の同意のもとで、有効な目的のために議会の合理化をはかり、最新式に変革したい。無益な議論を排し、政府に権限を与えようと我々が考えているのは事実だが、それは行動するためであって、誰かが力を持たない限りは何も実現できないからだ。国民から選ばれた議員によって構成される議会は、依然として政府を解散させる権限を持つため、それは独裁を意味しない。しかし、我々は直ちに全権委任法案（General Powers Bill）を可決し、評議会（Council）命令によってファシスト政府に行動する権限を与える。こうすることで、議会の妨害によって多数派の意志を妨害するような少数派の権力は、間違いなく終焉を迎えることになる。
>
> これを自由主義の終焉だと言う人もいるが、我々はこれこそが自由主義の始まりだと言いたい。真の自由主義とは経済的自由のことである。経済的自由によって、我々は安定した職業と収入を得ることができる。（中略）今日の経済的混乱のなかに自由はあるだろうか。そのような混乱に終止符をうち、人々が自由を手に入れるためには、政府に権限を与えなければならない。今日、国民の自由を象徴しているかに見える議会の妨害を断ち切らない限り、政府は行動する力を手にすることができない。今日「自由主義」と呼ばれているのは十九世紀的な愚かなものであり、真の自由主義は、それを取り除かなければ実現できないのである。我々は、人民の生きる自由と、人生の果実を享受する自由と、数人の老人が議会の議論に熱中する自由とのどちらかを選ばなければならない。(88)

以上の引用にモーズリーの議会主義批判のもう一つの核心部分があろう。彼が現行の議会を批判しているのは、議会がもっぱら政治的自由を担保するものであり、「経済的自由」を体現するものではないからであった。これは当時左派系知識人を中心に広く展開された議論に通ずるものである。彼らにとって選挙を通じた政治的自由とは既存の社

会構造を固定化する仕組みに過ぎない。「真の自由主義」とは人々の「経済的自由」を実現することであり、世界恐慌の煽りをうけて困窮する人々を救済し、彼らが豊かになることでこそ自由主義が実現されるという発想に基づいている。そこでは政治的自由は次善のものとされた。そしてモーズリーは、イギリスに深く根づく自由主義や民主主義という概念を否定するのではなく、それらを逆手にとって、廃止するのはあくまで討論であり、議会に内閣の解散権を保持させる限りにおいて民主主義が損なわれないことを強調している。

議会が膠着状態に陥って政府が何も行動できないのであれば、たとえ選挙で議員に信託が与えられたとしても、議会主義は万能な政治体制とはいえない。目前に広がる経済問題を解決に導くためには、より強い権限を内閣に集中させることが必要だとモーズリーは考えた。そして人々が経済的豊かさを手にしたとき初めて真の自由主義が実現するという論理を組み立てたのである。

なおモーズリーは経済危機が克服されれば議会の権限は回復されるべきと考えていたわけではない。もはや議会に強い権限を付与する時代は完全に終焉したと考えていた。経済状況が改善してもなお、モーズリーは既存の政府の形態と代表制に対する批判を繰り広げた。国政議員として目の当たりにした政治システムを「不正と裏切りのシステム」と形容し、その機能不全を訴え続けたのである[89]。

放任主義的な自由主義を放棄して国家介入型の自由主義により経済危機を乗り越えるべきだとする議論はE・H・カーやケインズにもみられる戦間期イギリスの言論空間を支配した一つの特徴である。しかし強い権限を内閣に集中させれば問題が解決されるという議論にせよ、経済的自由が政治的自由に優先されるべきであるという主張にせよ、はたまた議会が回収し得ない人々の民意とは何を指すのかという論理も含めて、モーズリーの議論は根拠がとかく曖昧である。議会に解散権がある限りは政府の権限が肥大化しても独裁を意味せず、民主主義や自由主義が保たれるとする主張も、議論の緻密さを欠いている。

だが統治機構の改革や議会のあり方に疑問を投げかけた問題意識それ自体は同時代に広く共有されたものであり、モーズリーの構想に戦後のベヴァレッジ・プランに通ずる視点を見出し評価する者もいる。[90]

問題は、ケインズやラスキなどの知識人のみならず他の多くの政治家とも問題意識を共有して同じ方向を見ていながら、その問題に対する解決策の論理の精度が先に挙げた知識人のそれに匹敵せず、実行可能な構想を築き上げられなかった点にあるのではないだろうか。それでも、『合理化による革命』（一九二五年）、『モーズリー・メモランダム』（一九三〇年）などの詳細な提議書が議員の側から構想されたことの意義は見過ごせない。その提議書は、取るに足らない荒唐無稽なものではなく、少なからず内閣の担当者や大蔵省でも分析され、一つの処方箋として真剣に議論されたのであった。同時代を生きたピトリーが「モーズリーが失敗した理由は、彼の政治的諸手法の故であって、彼の政治的諸目的の故ではなかった」[91]と観察したのは示唆的である。無論、同時代にモーズリーを痛烈に批判する人物もいた。その急先鋒クレメント・アトリー（Clement Richard Attlee）が、戦後チャーチルに代わってイギリス政治を率いることになる。[92]

おわりに

イギリス経済を立て直すために何年もの歳月をかけて経済構想を練ったモーズリーであるが、結局彼にその役目が回ってくることはなかった。そして第二次世界大戦後にイギリス経済を復興させたのは、皮肉にもモーズリーがあれほど批判した労働党と保守党であった。

だが彼は、一九三〇年代初頭までは、持て囃され、政治の世界においても傾聴される存在だった。首相候補と目された若き日のモーズリーは、第一次世界大戦を前線で戦った世代の代表として自負し、熟練の政治家を相手取って議

会では臆することなく持論を展開し、「イギリスの経済を立て直す」ために奔走した。その揺るぎない信念に基づく言葉には数多くの知識人、政治家が魅了されたはずだった。

モーズリーと共に新たに政治運動を画策するはずだった若き政治家達は、小選挙区制という構造的な要因によりモーズリーのもとを離れていった。やがてファシズムを奉じたモーズリーであるが、たとえ理にかなった政策を展開していたとしても、暴力的要素をイギリスに持ち込んだことは彼の政治運動が凋落する決定的な要因となった。

戦後にイギリス首相を務めたマクミランは、自らもモーズリーと交友関係を持ちながら、彼について次のように回顧している。「おごりと焦燥が、彼の議会における政治生命に終止符を打った。後に彼は議会制度を損なうような運動を展開し、イギリスにファシズムを持ち込もうとしたが、彼は挫折することを運命付けられていた。（中略）彼は、卓越した自らの才能と強烈な個性を無駄にしてしまった。もし適切なタイミングを待つことができれば、おそらく彼は権力を掌握することが可能であっただろう。彼は、動き出すのが早すぎた。そして永遠にその機会を失ってしまった。政治というゲームの本質は、『タイミング』なのだ」[93]。

モーズリーを評価するにあたって重要なのは、彼が達成した政治的成果ではなく、同時代の課題を見抜く鋭敏な感受性と的確な認識であり、今一度その観点から評価されるべきではないか。だが皮肉にもムッソリーニやヒトラーが斃れた後の戦後社会では、モーズリーに活動する場は与えられなかった。モーズリーが抱いたこれらの問題意識は、結局のところ、彼の友人を通じて広く共有され、戦後の知識人や政治家によって解決されていくことになる。

（1）なお本稿で用いる議会主義は、一般に議会政治の基礎となる代表制の原理とそれに基づく諸制度を擁護する思想を意味する。「議会主義」『ブリタニカ国際大百科事典・小項目事典』http://japan-eb-com.kras.lib.keio.ac.jp/rg/article-026662200（アクセス日：2023. 3. 13）を参照。

（2）　Sir Charles Petrie, *A Historian Looks at His World* (Sidgwick and Jackson, 1972), p. 114.

（3）　ブリティッシュ・ファシズムについては以下が主要な先行研究である。Colin Cross, *Fascists in Britain* (Barrie and Rockliff, 1961); Richard Thurlow, *British Fascism* (Croom Helm London, 1979); Richard Thurlow *and* Kenneth Lunn ed., *British Fascism: Essays on the Radical Right in Inter-War Britain* (Palgrave Macmillan, 1980); Richard Thurlow, *Fascism in Britain: A History 1918–1985* (Basil Blackwell, 1987); Mike Cronin, *The Failure of British Fascism: The Far Right and the Fight for Political Recognition* (Macmillan Press, 1996); Richard Thurlow, *Fascism in Britain: From Oswald Mosley's Blackshirts to the National Front* (I. B. Tauris Academic Studies, 1998); Richard Thurlow, *Fascism in Modern Britain* (Sutton Publishing Ltd, 2000); Thomas Linehan, *British Fascism 1918–1939; Parties, Ideology and Culture* (Manchester University Press, 2000).

（4）　中でも次の文献はイギリスにおけるファシズムを含めた様々な政治的イデオロギーの内容、歴史的背景を概説したものとして参照されたい。Robert Leach, *Political Ideology in Britain* (Palgrave, Third Edition, 2015).

（5）　*Ibid*, p. 187–188.

（6）　Cross, *The Fascists in Britain*.

（7）　イギリス・ファシスト連合のイデオロギーや政策に関する主要な先行研究は以下である。Neill Nugent, "The Ideas of British Union of Fascists," in *The British Right* (Farnborough, 1977); Gary Love, "What's the Big Idea?': Oswald Mosley, the British Union of Fascists and Generic Fascism," *Journal of Contemporary History,* Vol 42, Issue 3, July 2007; Robert Benewick, *The Fascist Movement in Britain* (Allen Lane, 2nd edition, 1972); Stephan M. Cullen, "The Development of the Ideas and Policy of the British Union of Fascists, 1932–40," *Journal of Contemporary History,* Vol 22, No 1, January 1987, pp. 115–136; Julie Gottlieb, "Body Fascism in Britain: Building the Blackshirt in the Inter-War Period," *Contemporary European History,* Vol 20, No 2, May 2011, pp. 111–136; David Redvaldsen, "'Science must be the Basis'. Sir Oswald Mosley's Political Parties and their Policies on Health, Science and Scientific Racism 1931–1974," *Journal of Contemporary British History,* Vol 30, Issue 3, 2016; Matthew Worley, "Why Fascism? Sir Oswald Mosley and the Conception of the British Union of Fascists," *Journal of History,* Vol 96, No 1, January 2011; Bret Rubin, "The Rise and Fall of British Fascism: Sir Oswald Mosley and the British Union of Fascists," *Intersections,* Vol 11, No 2, 2010, pp. 323–380.

（8）　イギリス・ファシスト連合のメンバーについて明らかにした主要な先行研究には以下のものがある。GC Webber, "Patterns

of Membership and Support for the British Union of Fascists," *Journal of Contemporary History* Vol 19, No. 14 (1984); S. Rawnsley, "The membership of the British Union of Fascists," in K. Lunn and R. Thurlow ed., *British Fascism*; WF Mandle, "The leadership of the British Union of Fascists," *Australian Journal of Politics & History* Vol 12 (1966).

(9) Robert Benewick, *Political Violence and Public Order: A Study of British Fascism* (Allen Lane the Penguin Press, 1969). 同研究に加えて、イギリス・ファシスト連合の暴力性およびそれくの政府の介入に関しては以下にも主要な先行研究がある。Stephan M. Cullen, "Political Violence: The Case of the British Union of Fascists," *journal of Contemporary History*, Vol 28, Issue 2, 1993; Richard Thurlow, *The secret state: British internal security in the twentieth century* (Wiley-Blackwell, 1994); Paul Cohen, "The police, the home office and surveillance of the British Union of fascists," *Journal Intelligence and National Security*, Vol 1, Issue 3, 1986; Jon Lawrence, "Fascist violence and the politics of public order in inter-war Britain: the Olympia debate revisited," *Historical Research*, Vol 76, Issue 192, 2003; Iain Christopher Edward Channing, "Blackshirts and White Wigs: Reflections on Public Order Law and the Political Activism of the British Union of Fascists," *PhD Thesis*, Plymouth University, 2014; Richard Thurlow, "State Management of the British Union of Fascists in the 1930s," in *The Failure of British Fascism* (Macmillan Press, 1996); John Stevenson, "The BUF, The Metropolitan Police and Public Order," in K. Lunn and R. Thurlow ed., *British Fascism* (1980).

(10) Neill Nugent, "The Ideas of British Union of Fascists," in *The British Right* (Farnborough, 1977).

(11) イギリス・ファシスト連合の反ユダヤ主義に関しては、以下が主要な先行研究である。W. F. Mandle, *Anti-Semitism and the British Union of Fascists* (Longmans, 1968); JD Brewer, "The British Union of Fascists and Anti-Semitism in Birmingham," *Midland History* Vol 9, Issue 1 (1984); Michael Spurr, "Playing for fascism': sportsmanship, antisemitism and the British Union of Fascists," *Patterns of prejudice*, Vol 37, Issue 4, 2003.

(12) Stephan M. Cullen, "The Development of the Ideas and Policy of the British Union of Fascists, 1932–40," *Journal of Contemporary History*, Vol 22, No 1, January 1987, pp. 115–136.

(13) オズワルド・モーズリーの評伝的研究としては、Robert Skidelsky, *Oswald Mosley: Politicians and the Slump: the Labour Government of 1929–1931* (Macmillan, 1975); Robert Skidelsky, *Oswald Mosley* (Macmillan; Revised edition, 1990); John D. Brewer, *Mosley's men: The British Union of Fascists in the West Midlands* (Grower, 1984); Stephen Dorril, "Sir Oswald Mos-

ley and British Fascism," *Modern History Review Magazine*, Vol. 20, (Hodder Education, 2018), p. 18-22; David Howell, *Mosley and British Politics 1918-32 : Oswald's Odyssey* (Palgrave Macmillan Limited , 2014); Stephen Dorril, *Blackshirt: Sir Oswald Mosley and British Fascism* (Thistle Publishing, 2017) を参照。厳密には学術書ではないが、息子ニコラス・モーズリーは父から譲り受けた膨大な資料に基づいて、Nicholas Mosley, *Rules of the Game: Sir Oswald Mosley and Lady Cynthia Mosley* (Secker & Warburg, 1982); Nicholas Mosley, *Beyond the Pale* (Secker & Warburg, 1983) を公刊している。

(14) 戸塚秀夫「世界恐慌とイギリス・ファシズム」東京大学社会科学研究所編『ファシズム期の国家と社会 7 運動と抵抗（中）』東京大学出版会（一九七五年）。

(15) 『イギリス現代史１９００-２０００』の著者ピーター・クラークは、文献案内の項目において、既述の理由からスキデルスキーのモーズリー伝は影が薄れてしまったと酷評している。詳しくは、ピーター・クラーク『イギリス現代史１９００-２０００』（名古屋大学出版会、二〇〇四年）、文献案内二七頁を参照されたい。見市も同様に、「サー・オズワルド・モズリーとイギリス・ファシズムの生成（上）」のなかで「スキデルスキーは『伝記作家』に許される『同情』の範囲を逸脱して余りにモーズリー寄りの記述に逸したとの印象は否めない」と論じている（四九頁）。

(16) OMD1/5, the University of Birmingham Special Collections Cadbury Research Library, Birmingham, the United Kingdom.

(17) OMD2/2/12, the University of Birmingham Special Collections Cadbury Research Library.

(18) *Ibid.*

(19) Richard Thurlow, *Fascism* (Cambridge University Press, 2004), p. 1.

(20) Ernst Nolte, "The 'Era of Fascism' and the Uniqueness of Fascist Ideology," Aristotle A Kallis ed., *The Fascism Reader* (Routledge, 2003), p. 149.

(21) Roger Griffin, "Fascism: 'Rebirth' and 'Ultra-nationalism'," in Kallis ed., *The Fascism Reader* (Routledge, 2003), p. 174.

(22) デ・フェリーチェ『ファシズムを語る』（西川・村上訳、ミネルヴァ書房、一九七九年）、一二五頁；石田圭子「【書評】ロジャー・グリフィン著『モダニズムとファシズム：ムッソリーニ、ヒトラーにおける始まりの感覚』（二〇〇七年）」、八〇頁等。

(23) Kevin Passmore, *Fascism* (Oxford University Press, 2014).

(24) 本稿においてイタリアやドイツを中心とした大陸型の「ファシズム」について記述する際にはカギ括弧を用いて表現する。

(25) Oswald Mosley, "A World Re-Born Under Fascism," *Daily Mail*, 1 May 1932.

(26) 戦間期イギリスの民主主義を批判的に概観した研究として、Stuart Middleton, "The Crisis of Democracy in Interwar Britain' *Historical Journal* Vol 66, Issue 1 (2022) を参照。同論文は戦間期イギリスにおける民主主義の危機を、同時代の知識人や政治家の言説を用いて詳細に論じた最新の優れた研究である。しかし社会主義の到来を待つ左派系知識人が、議会主義の危機を論じるのは現状分析以上の意味も含むものであり、その観点から史料批判がなされていない点に留意が必要である。その他、戦間期民主主義を脆弱かつ実験的なものとして捉えるものに次の研究がある。Mark Mazower, *Dark continent: Europe's twentieth century* (Allen Lane, 1998) ; Jan-Wemer Müller, *Contesting Democracy: Political Ideas in Twentieth-Century Europe* (Yale University Press, 2013) ; Richard Overy, The Morbid Age: Britain and the Crisis of Civilisation, 1919–1939 (Penguin, 2010) .

(27) "'Worst' historical Britons list," *BBC News*, 17 December 2005, http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk/4561624.stm.

(28) Nicholas Mosley, "Foreword," in *Rules of the Game: Sir Oswald Mosley and Lady Cinthia Mosley 1896–1933* (Secker & Warburg, 1982).

(29) A. J. P. Taylor, "Mosley's Mis-spent Talents," *Observer*, 6 April 1975, P. 23.

(30) *The Times*, December 4, 1980, p. 19.

(31) *The Daily Telegraph*, 4 December 1980, p. 7.

(32) 見市「サー・オズワルド・モズリーとイギリス・ファシズムの生成（上）」、五二頁。

(33) James Lees Milne, *Harold Nicolson Volume II: A Biography, 1930–1968* (Faber and Faber, 2012) , p. 17.

(34) Nigel Nicolson, ed., *The Harold Nicolson Diaries 1907–1964* (Phoenix, 2005), HND, 29 April 1931, p. 89. 以下、ＨＮＤと略し、日付を付して記すことにする。

(35) *Ibid.*

(36) Gareth Griffith, *Socialism and Superior Brains: The Political Thought of Bernard Shaw* (Routledge, 1993) .

(37) 『オーウェル著作集Ⅰ』（平凡社、一九七〇年）、一八二―一八四頁。

(38) Diana Mosley, *A Life of Contrasts* (The New York Times Book, 1977) , p. 96.

(39) Harold Macmillan, *The Past Masters: Politics and Politician, 1906–1939* (Haper & Row, 1975) , pp. 104-105.

(40) 本稿でファシストという用語を用いる際にナチ党員を含める場合には鍵括弧を付す。
(41) "'Worst' historical Britons list," *BBC News*, 17 December 2005, http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk/4561624.stm.
(42) Oswald Mosley, *My Life*（Black House Publishing, 2012）, p. 76.
(43) Skidelsky, *Oswald Mosley*, p. 72.
(44) Copy of a Letter from Sir Oswald Mosey to the Prime Minister, PRO 30/69/446, The National Archives（以下、ＴＮＡと略する）in Kew, the United Kingdom.
(45) Rubin, "The Rise and Fall of British Fascism: Sir Oswald Mosley and the British Union of Fascists," p. 328.
(46) Mosley, *My Life*, p. 253.
(47) Rubin, "The Rise and Fall of British Fascism: Sir Oswald Mosley and the British Union of Fascists," p. 328.
(48) F. W. Leith-Ross, "The Banks and Rationalisation,' 5 February 1930, T175/41, the Treasury, TNA in Kew, the United Kingdom.
(49) Cross, *The Fascists in Britain*.
(50) Ａ・Ｊ・Ｐ・テイラー『イギリス現代史　１９１４-１９４５』第一巻（みすず書房、一九六八年）、二五七頁。
(51) Oswald Mosley, Speech to the House of Commons, Hansard, 29 May 1930, column 1350.
(52) *Evening Standard*, 29 May 1930
(53) *Spectator*, 31 May 1930.
(54) Norman Rose, *Harold Nicolson*（Random House, 2006）, p. 168.
(55) Stanley Olson ed., *Harold Nicolson Diaries and Letters 1930-1964*,（Athenium, 1980）, November 6, 1930. 以下、ＨＮＤＬと省略し、日付を付して記すことにする。
(56) Milne, *Harold Nicolson*, Volume II, p. 7.
(57) HND, 30 November 1930, p. 86.
(58) Milne, *Harold Nicolson*, Volume II, p. 15.
(59) HNDL, 30 November 1930, p. 21.
(60) Alistair Horne, *Macmillan 1894–1956: Volume I of the Official Biography*（Macmillan, 1990）, p. 91.
(61) Rose, *Harold Nicolson*, p. 168.

(62) *Ibid.*
(63) テイラー『イギリス現代史』Ⅰ、二七五頁。
(64) HNDL, 15 February 1931, p. 23.
(65) Rubin, "The Rise and Fall of British Fascism: Sir Oswald Mosley and the British Union of Fascists," p. 341.
(66) Robert Benewick, *The Fascist Movement in Britain*, pp. 73–75.
(67) HND, 29 April 1931, p. 89.
(68) Simon, Ball, *The Guardsmen*: Harold Macmillan, Three Friends and the World They Made (Harper Perennial, 2010), p. 118.
(69) C. M. D. Joad, 'The Case for the New Party,' *New Party Broadcasts No. 1*, OMN/B/7/1/2, the University of Birmingham Special Collections Cadbury Research Library.
(70) Colin Holms, 'New Party,' in John Ramsden (ed.), *The Oxford Companion to Twentieth-Century British Politics* (Oxford University Press, 2005), pp. 467–468.
(71) HNDL, 30 May 1931, p. 26.
(72) 細谷雄一『外交による平和―アンソニー・イーデンと二十世紀の国際政治』(有斐閣、二〇〇五年)、二八九頁。
(73) Ball, *The Guardsmen*, pp. 119–120.
(74) *Ibid.*
(75) *Ibid.*
(76) Mosley, *A Life of Contrasts*, p. 96.
(77) Matthew Worley, *Oswald Mosley and the New Party* (Palgrave Macmillan, 2010), p. 109; Matthew Worley, 'What was the New Party? Sir Oswald Mosley and Associated Responses to the 'Crisis', 1931–1932,' *History*, Vol 92, Issue 305, (January 2007), pp. 39–63.
(78) Jeffery Sachs, *The price of civilization* (Random house, 2011), p. 107.
(79) オーウェル「イギリス人の政治観」『オーウェル著作集』Ⅲ(平凡社、一九七〇年)、一五頁。
(80) Oswald Mosley, *The Greater Britain* (Black House Publishing, 2017), p. 7.

（81） Stanley Baldwin, Speech to the House of Commons, Hansard, 12 November 1936, column 1144.

（82） Molsey, *The Greater Britain*, p. 22.

（83） Walter Bagehot, *The English Constitution*, edited by Paul Smith（Cambridge University Press, 2001）, p. 22.

（84） Mosley, *The Greater Britain*, pp. 18–19.

（85） ハロルド・ラスキ著、前田英昭訳『イギリスの議会政治』（日本評論社、一九九〇年）、二〇頁。

（86） ラスキ『イギリスの議会政治』、二四頁。

（87） Mosley, *The Greater Britain*, p. 20.

（88） Oswald Mosley, “Does England Need Fascism?,” *Listener*, Vol 9, No 219, Wednesday, 22 March 1933, p. 433.

（89） “The Fascist Creed,” *The Observer and West Sussex Recorder*, 17 April 1935.

（90） Emilio Ocampo, “Sir Oswald Mosley’s Contribution to the Interwar Policy Debate and Fascist Economics,” *Serie Documentos de Trabajo*, No 730, Universtiy of CEMA, Buenos Aires, 2020.

（91） Petrie, *A Historian Looks at His World*, p. 114.

（92） Kenneth Harris, *Attlee*（Weidenfeld and Nicolson, 1982）, pp. 130–131.

（93） Macmillan, *The Past Masters*, pp. 104–105.

山本　みずき（やまもと　みずき）
所属・現職　慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程
日本学術振興会特別研究員（ＤＣ２）
最終学歴　慶應義塾大学大学院法学研究科前期博士課程
所属学会　日本政治学会、日本国際政治学会、国際安全保障学会
専攻領域　英国政治史
主要著作　「越境するファシズム――ダイアナ・ミットフォードとＢＵＦのナチスへの接近」『法学政治学論究』第一二九号、二〇二一年。
『国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ――藤井宏昭外交回想録』（吉田書店、二〇二〇年）。